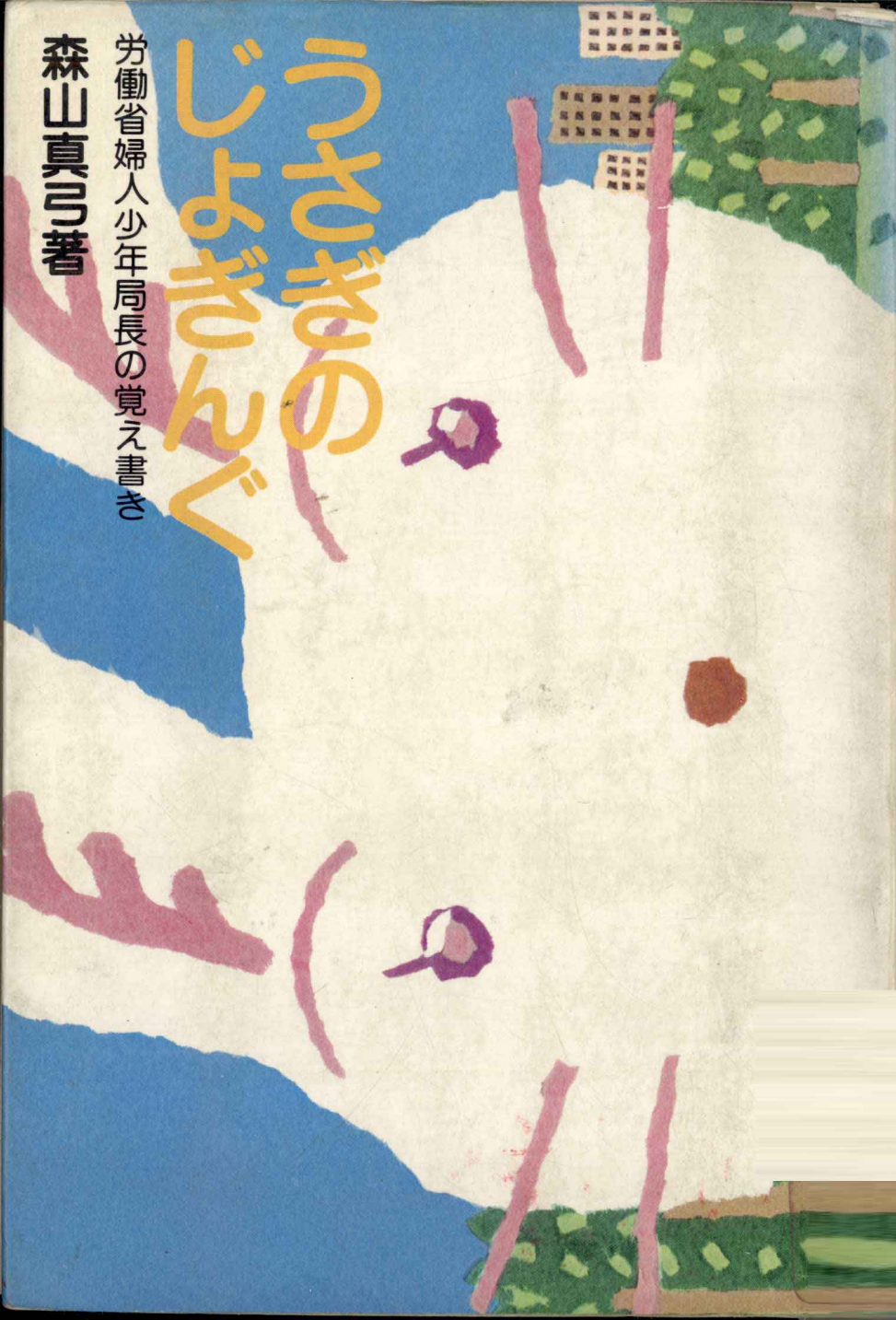
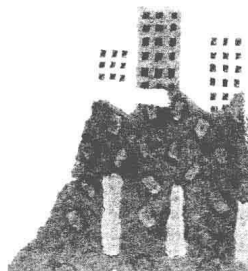


うさぎの じよぎんぐ

労働省婦人少年局長の覚え書き

森山真弓著





うきぎの じよぎんぐ

労働省婦人少年局長の覚え書き

森山真弓著

うさぎのじよぎんぐ

昭和55年4月20日 1刷

定価 一〇〇〇円

著者 森山真弓

発行者 清水大三郎

発行所 株式会社 サンケイ出版

東京都千代田区大手町一の七の二(〒100)

TEL(東京)三三―七一一(代)

大阪市北区梅田二の四の九(〒530)

TEL(大阪)三四三―一二二一(代)

印刷 サンケイ総合印刷

製本 田中製本印刷株式会社

※万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします

●今年の初め、私は三十年に及んだ公務員生活を終わった。昭和二十五年、学校を卒業してすぐ労働省に入り、桜の咲きみだれていた竹橋の木造バラックの一隅に見習いとして配置されてからとても長い長い年月であったようでもあり、あつという間の短い時間だったようにも思われる。

●就職する半年前に結婚していたから、最初からの共稼ぎ、主婦業も職場も慣れぬことから病気になるって暫く休んだこともある。三人の子供を産み、育てつつ、係長、課長補佐と責任が重くなり、六カ月の海外研修も出かけた。帰国後まもなく、女としてはじめて、地方労働基準局監督課長に転勤し、はじめての土地で、はじめての仕事に取り組み、夢中で過ごした。この頃までの十数年間は、今考えると、心身ともに一番大変な毎日だった。その後の十五年間は、労働統計調査部雇用統計課長、婦人少年局婦人課長、労政局労政課長、大臣官房国際労働課長、そして婦人少年局長と、有意義な仕事に次々と恵まれ、国際経験も数々重ねて、目を開かれた。労政課長時代に長男を十六歳で失った悲しみを除けば、まことに充実した、張り切った日々だった。

●特に最後の五年半余りの婦人少年局長時代は、昭和五十年の国際婦人年にめぐりあわせ、婦人問題についての関心の高まり、婦人自身の生活と意識の大きな変化に、ささやかな一役を果たすことができたことを、嬉しく誇りに思っている。

●人生に大きな一区切りがついたこの機会に、卒業制作みたいな気持ちで、今まであちこちに書いたものを整理してまとめることを考えた。私は昭和二年卯年の生まれなので、題を『うさぎのじょぎんぐ(ジョギング)』とした。このうさぎは飛びすぎず、跳ねすぎず、足を地につけ、長い道を走り続けてきた。これからもまた、やさしく、強く、走り続けていきたいと思う。

●編集構成に協力して下さったフリー編集者、大学の後輩である柿沼美幸さんに心から感謝する。

昭和五十五年四月

森山 真弓

女でも損をしない女の時代……………5

やっぱり本当かも／東大入試の思い出／女だから得をした話／きめ手に変わりなし／ガイドラインってなに？／最後の一日／新たな渦の中へ

仕事も家庭も三十年……………23

／紹介結婚／ねんねこ／忙しいってどんなこと？／師とのめぐりあい／二人のボス／婦人少年局長の週間日記／女とゴルフ／中年ミセスの美しさとは…………／カメキチの夫と共に／五十歳からの新たな出発／おんなの午後／の生き方／八〇年代の主婦像

忘れられぬ人たち……………63

まぼろしの祖父／十一月七日／納めの日／女の先生／ほの白い顔／並木道／太郎

ヨロツパひとり旅六カ月……………81

「ひとり」ではない私たち／ILO総会に出席して／「福祉国家」の子供たち／水と窓／ダッチアカウント／イギリスの婦人／スウェーデンの家庭／デンマークの老人たち／三十年後の悩み／「お休み」ということ

国際会議に跳ぶ

127

モスクワ'70年秋／カナダ・アメリカ・メキシコ'74年秋／メキシコ'75年夏／アメリカ'75年夏／カナダ・トーキョー'75年秋／スウェーデン・西ドイツ'76年秋／ベルギー'77年冬／東ドイツ'78年秋

健やかな娘たち

179

だんぜつ？／現代娘／猫と娘たち／相撲と女性／男女共学にひとこと／男は八十、女は五十／日本は狭すぎる／女子大生の就職問題／フレッシュOLのあなたに／脱OLのすすめ／初夢／現代っ子先生／野球娘

明日へのジョギング

213

カーターさんの一言／働く若者に幸いあれ／拜啓、サッカー協会様／青い空と白い道／明日を作る女性たち／フィナーレの憂うつ／震災と老先生／狭き門を入りたい女性へ／気がついていない社長さんへ／建前さえ？／労働組合の中で／立会演説会／婦人の政治参加／雨／婦人大臣まだかしら？／私のハムレット／秋夜一刻値千金／犬の卒倒／「江川問題」並み／働く母たち／映画の中の女／神様の御託宣／遙かなる友よ／新たな目、やわらかい心

カバー画・装幀 山下礼三
写真提供 原田大三郎ほか

女でも損をしない女の時代



——やっぱり本当かも——

お正月のある日。こたつに入って分厚い新聞の頁を一枚ずつめくっていた。

政治は内外ともに混乱、経済は暗中模索、どっちにしてもお先真つ暗、霧の中というところで、今年はあまり幸先がよくない。これから始まる八〇年代もこんなスタートではどうなることやらとため息をつきながら、何気なく開いたある頁に、私は目をみはった。

それは東京のＩＤＥパートの広告である。紙面をいっぱいに使った写真で、ランニングシャツにショートパンツ、ポニーテイルの長い髪を風になびかせ、額にきりつと鉢巻きをしめて、白い線がくっきりとひかれたグラウンドを大またで走る若い女性である。軽くこぶしを握って、筋肉のひきしまった腕を振り、たくましい脚をのびし、力強く大地をけつている。

その下に大きな活字で「女の記録は、やがて、男を抜くかもしれない」とあり、続けてやや小さく「女性と男性は……肉体のパワーで対等なんだということが次々と実証されてきました。男と女が肩を並べる、あたらしいパートナースhipの年、それがたったいま始まったところです……」と。

紙面の女性は、ちょっと苦しげに眉をひそめたきびしい表情で、激しい息づかいや心臓の鼓動が聞こえてくるようである。

店の宣伝めいた文句はとくにないが、大事なお客様である女性の力を真正面から評価、賞賛して、アピール効果は抜群と思われた。なかなか考えた異色の広告だなあと感心しながら、頁をめくると、もうひとつＳ化粧品会社の広告が目に入った。

これはバレリーナが両腕を広げ、爪先で立った姿の写真だ。そして紙面左上に大きな字で「筋肉の鍛練が美しさへの道です」とある。バランスのとれた美しい形を作った両腕

と、体をしっかりと支えている両脚は、たくましく、いかにも鍛えぬかれて筋金入りという感じである。筋肉も毎日の鍛練が何より大事、お化粧も毎日の手入れが大切、であることを強調する趣旨だが、それにしても、女性むけの宣伝文句の冒頭に「筋肉の鍛練……」というのは今までになかった発想じゃないかしら。

面白くなって探してみると、他にもある、ある。Tデパートは四十代のきれいな女医さんの大写真だ。「女性も職業と家庭の両方をせいっぱい生きて、年輪を経た四十代からがほんとうのおとな、そういう女性の生活に役立つデパートです」と宣言している。

K化粧品は「女性が活躍するほど、社会は健康に美しく発達する」とうたい、そういう女性にふさわしいお化粧を、といっている。

お正月の広告といえば、日本髪に振り袖の美女がにっこり笑いながらうやうやしく、新春のお買い物は当店へとか、今年も当社の化粧品をご愛用下さいとかいうのが通り相場だったのに、ずいぶん変わったものだ。

人目を引くために奇をてらったのだろうか。いや、女性に縁の深い二大業界が揃って、となれば奇とはいえない。高いお金を払ってこんな大きな広告するのは、大勢の人が時をかけて議論し、吟味してきめたに違いない。一時の思いつきや誰かの趣味じゃないだろう。そうとすれば、広告担当重役をはじめ企業幹部（その殆どが男性）のもつ女性のイメージが変わってきたんだ。彼らが、こういう女性に大衆が好感を持つと判断したっていうことなんだ……。

私は紙面に躍動するタフな女性たちを眺めながら、「八〇年代は女性の時代」っていうのはやっぱり「本当かも知れない」と思い、ブランドーのボトルに手をのぼした。

——東大入試の思い出——

昭和二十一年初冬のある日。火の気のない寒い教室で、始業前のひととき、級友と雑談していた。津田塾専門学校三年の時のことである。

終戦前後の混乱のため、入学時の同期七十人余りが半分に減っていた。残っていた者も前半の一年余が空襲やら勤労動員やらで、授業時間は非常に少なかった。それでも世間に英語を勉強する人がほとんどいなかった時だったので、稀少価値はあり、就職はどうにかなりそうだったが、

「あなた方は開校以来のどん底です。こんな卒業生を出すのは恥ずかしい」

と先生に嘆かれ、実力不足は自分でもよくわかっていたし、卒業が近づくにつれ、漠然とした不安を感じていた。

一方、その頃は、婦人参政権、男女共学などが次々と実施されて、女にとっては明るい光の見えるはじめていた時でもある。同級生の間で誰と誰は東大を受けるといふような噂がぼつぼつ聞こえていた。その一人がたまたま私の隣に座っていた。

「あなた東大受けるんだって？ 難しいんですよ。どんな課目があるの？」と聞くと、「国語、英語、日本史、西洋史、それに第二外国語が必須なのよ」という。

「ふーん、そんなにたくさん、大変ね。第二外国語があるんじゃない、私にはとてもだめだわ」と私。すると彼女は「これは文学部のことで、東大だっていっても他は別よ。法学部なんかもっと課目が少ないって聞いたわ。やってみたら？」と言った。「へえ、ほんと？」

今まで全く無関心で何も知らなかった私は好奇心をそそられた。調べてみると、たしかに法学部は、英語と論文と総合課目の三つだけ。総合課目とは男子の旧制高等学校で普通やっている一般教養課目のことだという。そんなら私だって何も書けないってこともなさ

そうじゃないか。一つ、話の種に東大の入学試験なるものを受けてみるか、せっかくこういう時に生まれ合わせたんだもの、子供や孫に話す面白い話題になるかも知れないヨ……。

そう考えたのがもう暮れもおしつまった時だった。

入学試験は三月上旬だったと思う。あと二カ月余しかない。まず前回受けて合格した津田の先輩を訪ね、いろいろ様子を聞いた。

「今は猫も杓子も民主主義だからそれに関連した問題が出そう。西洋政治史が大事。論文にはこれと思う新聞の論説を二つ、三つ暗記しておくに役立つ。改革ばやりのご時世だから、新旧の調整というようなテーマがヤマかも」

そんなヒントをもらい、総合課目のために、哲学、経済学、法学、論理学などの入門書や分厚い西洋史の本などを一抱え借りてきて、その日から夜昼なしの猛勉強にとりかかった。

二カ月はたちまち過ぎて、試験当日が来た。二千人余りの受験生の中には、かなりの年長らしいひげ面の復員軍人も多く、試験場にはカーキ色と紺色の軍服が目立った。女子の受験生は八人だけ、しかも私のような小娘はいない。こりやとても無理だ。やっぱり話の種っていうだけのことだったと、早くもあきらめの心境で試験問題をあけて見ると、最大多数の最大幸福、グreshamの法則、三段論法など、借りものの本で覚えた言葉が幾つかパツと目に入り、論文の題は『革新と伝統』。ずばりヤマが当たっていた……。

なお、あの同級生も文学部に合格した。現在、東大教授の中根千枝さんである。



●女学校4年



●東大時代 昭和25年



●小女時代 姉と 昭和9年

——女だから得をした話——

わが国の社会が、特に職業の社会が、圧倒的男性支配にできているため、私は今までに女なるが故に得をしたことが多い。これは矛盾しているように聞こえるかも知れないが、本当の話である。

「女の身で二十数年も、男の人と同じように職場でやってくるには、さぞ苦勞が多かったことでしょう」と同情をこめた質問されることがよくある。しかし、これは私個人に関するかぎり、見当違いである。

私は三人姉妹の長女で、縦のものを横にもしない父のほか全員女ばかりの家に育ったので、引越しても、大掃除でも、男手を借りるということが余りなく、かなりの力仕事も、こみいったことも、母と私たち姉妹でやるのが普通だった。だから親に女の子だからと特に甘やかされもしないし、また「女の子のくせに出しゃばるな」などといわれた覚えもない。

学校も今と違って、公立小学校でも男子組、女子組に分かれていて、学級の仕事や役割は、女子組は当然女子だけでやって、男子を補佐するとか、助けてもらうとかいうことはなかった。その後、女学校から女子専門学校と通ったが、それらも、女だからという理由で損をしたり、得をしたりする場はなかった。

したがって、私にとって女なるが故の特別扱いの初体験は、東大法学部においてである。入学早々、女子用トイレが整備されていないことを発見して、ここが昨年まで男性社会の牙城であったことを具体的に実感させられたが、それよりも、同期生六百人中、女二人という物珍しさから、日常の立ち居振る舞いを注目されて、きゅうくつなのは閉口した。数が少ないということは損だなあと思いつづけていたが、半面、意外に得なことも多

かった。

当時は戦争直後の物資不足の時で、本もノートもろくに揃っていない、優等生が教授の講義を筆記したものをガリ版に刷って、協同組合で売っていたのが唯一の教科書だった。しかも、これがまた数が十分でなくて、手に入るのがひと苦労であった。長い列を作って協同組合売店の開くのを待ったもので、そういう時、私が並ばうとすると、顔見知りの学生が必ずといっていいほど前に入らせてくれたし、時には並ばなくても、売店の係の学生が私だけ別に一部とっておいてくれたりして、ずいぶん助かった。

必須科目で人気ある先生の教室は、前の方でよく聞こえる席をとるのが大変だったが、これもだいたいの場合、いい席を確保しておいてくれる有志がいて、ありがたかった。

というわけで、はじめての男性社会の経験は、不便な点もあったが、どちらかといえれば一種の特権階級のようなものであった。稀少価値のおかげである。

就職して労働省に入ったが、はじめに配置された婦人少年局では女性が大半だから、女学校に戻ったようなものである。管理職の多くが女性である一方、荷造り発送のような仕事も女性でほとんどやる。十年たって他の局へ移り、はじめての大掃除の時、窓のガラスふきや机の移動など全部男性がやってくれたので驚いた。世の中一般ではこういう力のいる仕事や高い所にのぼる仕事は、男がまずやることになっているのだなど、あらためて認識した。

千葉労働基準局の監督課長をしていた時、職務上よくヘルメットをかぶり、作業服を着て、京葉工業地帯の建設現場へのぼったり、夜おそくまで職場の皆と飲んで、家へ帰らずに千葉へ泊まっちゃうということがよくあった。

「女性なのによくつきあう」と評価してもらったらしいが、こんなことは男性の課長なら当たり前のこととして、誰も何とも思わないだろう。また、女性が中心になっている女学校や婦人少年局では、女が当たり前のことをしたただけでは、ほめてくれない。やはり男性社会にいたからこそ、私は得をしたのである。

同様に、雇用統計課長で、各県の統計課に面倒な仕事を頼みに歩いた時、労政課長で、局の予算課長として大蔵省と徹夜の折衝をした時、また、国際労働課長として各種国際会議の裏方をしたり、日本政府代表として出席したりという時、職務上当然のことをしているだけでも、女であると相手の印象に強く残る。これは大変な得であって、少々損なことがあったとしても、それをつぐなうて余りある。

かくして、私にとって男性社会の住み心地は大変よく、快適で、楽しいものだった。あまり気分がよくて、このままでは次第にスポイルされ、自分がダメになってしまうのではないかしらと懸念しはじめた時、幸いにして婦人少年局へ戻ってくることができた。

そして、さっそく国際婦人年にぶつかり、男女平等のキャンペーンに一役かっている。これが効を奏して、すべての職場に本当の男女平等が実現したら——女が当たり前のことをしてほめられるなんていう甘い生活とはおさらばであろう。

きめ手に変りなし

国立劇場で文学座の『女たち——九女八一座の人々』を観た。たまたま切符を入手したので、ということだったのだが、なかなか面白く、大変感銘を受けた。

大奥に出入りしていた狂言師出身の女性が、明治の初め、それまで女には禁じられていた演劇の世界に入り、努力と負けん気で見がいた実力を高く評価され、女団十郎といわれるようになった。杉村春子の演ずる市川九女八である。

九女八は、早くから女歌舞伎のスターとして人気をくしていたが、封建的な偏見や因習の強く残っていた当時の演劇界で、女の役者が、女であるために、男の役者より一段低く見られることが納得できなかった。そしてその偏見を打ち破るべく、歌舞伎宗家市川家の十八番であり、最も男性的な『勧進帳』に女ばかりの一座で挑戦する。

「世間が、役者と女の役者を、同じ役者と思ってくれようとしなさい。それがわたしや、不足だと言ってるんだ。女でも九女八は、九代目団十郎と同じように勧進帳の弁慶をやった。男も女も区別はないと、世間の人に言わせたいのよ」と。明治十二年のことである。

わが国は、明治になっても、江戸時代の武家の習慣が踏襲され、男尊女卑の風潮が一般的で、女性が社会的、公的な活動の主役となることは、事実上許されなかった。演劇の世界は、その仕事の性質上、むしろ一番早く女性の存在価値が認められた方なのではないかと思うのだが——。パイオニアの苦勞はここにもあったのだ。

九女八の人氣がますます高くなり、批評家たちがほめそやし、当局も男女合同の演劇を許可して、いよいよ団十郎と九女八の合同公演の話がもちあがると、団十郎は、女役者なんかと一緒に舞台に出られるかと、これを拒否した。今、女と一緒に舞台に出るのがいいやだという男優がいたら、氣が変だとは思われないであろうが、当時はそういう理屈が通